

太平洋島嶼地域の伝統社会の存立構造

飯森 文平（東京農業大学）

1. はじめに

太平洋島嶼地域では、1962年に西サモア（現サモア独立国）が独立して以降、多くの独立国家が誕生した。これらの国々は独立により国家経済の自立という大きな課題に直面することになった。しかし、嘉数啓（1986）が指摘するように、島嶼地域では、土地が狭く散在し、資源が限られ国内市場の規模が小さく、規模の経済性が働かないなどの諸要因により国内産業が未発達な状況に陥り、持続的な経済発展のための選択肢は限定され、低開発からの脱却も困難な状況にある。そのため近代化は遅れ、経済の維持についても、パートラムとワッターズ（1985）による MIRAB 国家論で説明されるように海外援助や海外移民からの送金に大きく依存している状態である。このように、太平洋島嶼諸国の多くはマクロ経済的な観点から見れば非常に貧しいと言わざるを得ない。

しかし、マクロ経済的な貧しさは、ローカルの人々の実生活における貧困と必ずしも直結しない。例えば、筆者が調査をしているサモアでも、自らの生活の「豊かさ」を強調する者が数多く存在するのである。MIRAB 国家論は国内におけるサブシステム部門の存在を前提とした議論でもあるが、低開発状況下における人々の実生活は独自の制度、文化、慣行、知恵、価値観など、地域の固有性にに基づき構築される社会（伝統社会）によって支えられてきた。いわば伝統社会が生活維持基盤としての役割を果たしているといえるのである。本報告ではそうした社会の存立構造について、海外移民からの送金など経済のグローバル化がローカル社会に与える影響も考慮に入れながら具体的に検討する。

なお、本報告ではサモア独立国（以下サモア）の村落社会を事例として取り上げることとする¹⁾。サモアは多くの海外移民を輩出し、彼（彼女）らからの送金に依存する典型的な MIRAB 国家として資本主義経済システムの末端に組み込まれながらも、サモア人としての生活は依然として伝統的社会慣行・価値観である「ファア・サモア（サモア流）」に依拠している。サモア流に基づく社会は、ミクロレベルにおける生活維持基盤として機能している。こうした社会的背景が、本報告でサモア社会を事例として取り上げる大きな理由である。

2. サモア村落社会の構造と機能

サモア流社会の最小構成単位はアインガと呼ばれる親族組織である。拡大家族（Extend Family）とも呼ばれるように、その形態を見た場合、複数の夫婦・核家族や単身者から成立する。アインガの内部では、基本的には自給自足を中心とした生活形態が築かれている。その基盤となるのは、カスタマリーランド（慣習地）と呼ばれるアインガに代々継承されてきた土地であり、この土地が屋敷地や混作畑として利用されている。また、アインガ内部では、大きな権限を持つマタイ（家長）を介して、個々人の労働の成果がメンバー間で共有（Sharing）される構造が作られている。これは、アインガ内の個々のメンバーが、アインガの繁栄という共通の目的のために自らの義務を果たしアインガに貢献するという一種の規範によるものである。こうして、アインガではメンバーの相互扶助によって食料や居住地の確保など、最低限の生活を保障する機能を有していると考えられる。

また、村落内には、村落会議組織（以下、村会）、女性グループ、男性グループなどの村落組織が存在する。これらの組織の活動は、対内的活動と対外的活動に分けられる。対内的活動は、村会による治安や規範の維持、男性グループによる農業開発や、女性グループによる生活改善などがある。対外的活動は、政府や他村落など外部機関との接触・交渉である。例えば、あるアインガが村落外のアインガに対して

不祥事を起こした場合、その処理は当事者同士ではなく、村会が紛争処理の窓口となる。

以上の検討から、サモアの村落社会では、アインガと村落組織が重層的にセーフティネットを構築していることが明かになった。例えば、農作業に関して、自らの農地でどのような作物を作るかは、基本的には各アインガの判断にまかされている。しかし、村会の村内巡視に基づいて男性グループが作付けを義務付けられることもある。つまりこれは、アインガと村落共同体の双方によって、より確実な食料確保が可能になるような仕組み、言い換えれば、サブシステム・システムの構築、維持がなされていることを意味する。

3. 送金経済と社会慣行

(1) 社会慣行の現金化

しかしながら、サモアの社会が今なお自給自足経済に全面的に依拠しているわけではない。そうした機能が維持される一方で、社会には既に貨幣経済が深く浸透している。こうした要因の1つとなっているのが、大量の海外移民の存在と彼らからの送金である。そこで、家計構造と世帯レベルにおける送金経済に着目し、貨幣経済の浸透が農村生活に与える影響について検討を行った。その結果、送金を含めた多額の現金がファアラベラベと称する伝統儀礼を中心とする社会慣行の領域で消費されるという事実が明らかとなった。

ファアラベラベとは、冠婚葬祭、マタイの就任式、新居の落成式などに伴って、関係者間で大量の財の交換が生じる儀礼である。各アインガでは、財として、タロイモ、ブタ、ココナッツなどの食料や、女性がパンダナスの葉で編んだファインマットを用意するが、現代では、現金や缶詰が新たに加わるなど、財の用意に多額の現金が必要となっている。

加えて、教会への寄付も重要である。宗派によっては毎週の礼拝の際に、寄付者名と金額を公表し一種の競争が煽られている。また、現金は村落の規則を破った際の罰金支払いのためにも必要となる。罰金の額は、犯した罪の内容によって異なるが村会に支払わなければならない。

以上のように、現在のサモア社会では、送金の多くが社会慣行の領域で消費されることが判明した。これは、貨幣経済の浸透によって社会慣行の内容が現金化されながらも、社会慣行そのものは依然維持されているとも捉えられる。つまり、海外からの送金は種々の社会慣行を継続していくための手段であり、送金に伴う貨幣経済の浸透は、伝統的社会慣行の内容を一定程度変容させつつも、その枠組みについては維持する方向に作用している。

(2) 社会慣行が維持されることの社会的意味

こうした状況が、サモア社会にとってどのような意味を持つのか儀礼ファアラベラベを例に考えてみたい。ファアラベラベは、その実践に伴い関係者間で財の交換が生じる点に特徴がある。しかし、ファアラベラベの本質は準備を含めた一連の過程にある。

儀礼の当事者となるアインガは、財の交換に備え事前に大量の財を調達しなくてはならない。当事者は、これを滞りなく遂行するために、財の調達段階において様々な者(親族、近隣者、友人など)から協力を得ている。また、協力者自身も、当事者を援助するにあたり、自らの関係者から協力を得ているのである。つまり、ファアラベラベの本質とは、一連の過程の中で、当事者とは直接の関係を持たない者も含めた数多くの人々を芋づる式に巻き込んでいくような運動(山本泰・山本真鳥 1996)なのである。このように、ファアラベラベの実践は社会的ネットワークの構築、維持に大きく関係しているといえる。

また、通常、こうした協力には返礼が伴うように、儀礼の実践過程の中では様々な互酬関係が確認できる。返礼は必ずしも儀礼の場でのみ行われるとは限らない。筆者が調査でサモアに滞在している際にも、あるアインガが儀礼のために他のアインガに貸した現金に対する返礼が、ある日の夕食時のイモや魚介類であるといったケースもしばしば見られた。このように、儀礼の実践で確認された互酬関係は、

即時的でなくとも(儀礼の場でなくとも)、いずれは返礼する(必ずしも等価・同質のものでなくとも)という、いわば日常生活におけるシェアリングの延長線上にある。

こうした互酬関係はアインガ内でも見られる。ファアラベラベの場ではアインガが1つの単位となるのが普通である。その際、家長(マタイ)世帯が儀礼の遂行に責任を負うのに対して、構成世帯は各種の財を家長世帯に供出する。つまり、アインガ内においては、家長世帯の責任に対する、他世帯の貢献という形で互酬関係が築かれている。しかし、こうした関係も日常生活の延長上にあるといえる。例えば、調査農家である世帯 a は、日常的にアインガの農地を管理し、儀礼の有無に関わらず家長世帯に対して食料を持ち寄っている。しかし、世帯 a は農地から食料の確保はできても現金収入は僅かである。そこで、現金の必要性が生じた場合、家長世帯が経済的な援助をするのである。このように、世帯 a と家長世帯の間では互酬関係が日常的に顕在化しており双方の生活を支え合っている。

一方、海外移民世帯と母国アインガの互酬関係の形は少し異なる。例えば、移民世帯は、母国アインガに大きな物入りが生じた際に、分担供出として送金を行う。それに対し、家長世帯からは、移民世帯の移住先のサモアンコミュニティでファアラベラベなどが生じた際に、ファインマットや食料などのいわゆる伝統財が送られる。このように、母国アインガと移民世帯の紐帯は双方に生じた物入りを介して顕在化し維持される傾向にある。

4. まとめ

サモアにおける生活維持基盤は、地域固有の制度、文化、慣行、知恵、価値観などに基づく伝統社会システムの中で構築されている。例えば、サブシステムは、慣習地という土地制度、アインガ内における紐帯の維持、アインガと村落共同体とのネットワークなど多様な要素が絡み合う中で成立していた。

また、ファアラベラベなどの社会慣行は、多額の現金が費やされながら現在も依然として盛んに行われている。ファアラベラベという語には「通常の生活を混乱させ、その為に特別な活動を必要とする事柄」(Milner 1966)という意味があるように、これは、人々にとって経済的にも精神的にも非常に大きな負担である。実際に他者に協力するために自らが稼いだ現金を消費することに不平を述べる者も現地には存在する。一方、サモアの人々は自身の生活基盤を維持するため積極的にこうした行為を行っているとも考えられる。なぜなら、大きな負担を感じながらも他者へ協力を惜しまない理由として、複数のマタイから「今日はあなた、明日はわたし」という同じ説明が聞かれたのである。つまり、明日、自らに起こるかもしれない問題に備え、今日は他人を援助するのである。これは、自身の生活を維持するために、互酬性に基づくようなネットワークの存在が不可欠であることを示唆していると考えられる。こうした関係性が特に顕著に現れる儀礼の実践過程は、儀礼の遂行のみならず、日常生活全体を支えるセーフティネットの構築の場としても重要である。

太平洋島嶼地域では、地域固有の生活様式が人々の実生活を支えてきた。これは、西歐的発展モデルを標榜する開発においては、経済発展を妨げる要素として認識されてきたものであろう。しかし、地域固有の生活様式は、他者との連帯に基づくコミュニティの形成や再編成に加え、住民の手による社会生活の向上を実現する上で重要な役目を果たし得ると認識されるようになってきている。西歐的な意味における近代化が極めて困難な状況にある太平洋島嶼地域において、こうした視点を「開発」の枠組みの中にかかにして位置づけられるかが今後特に重要な課題となろう。

引用文献

Bertram, I.G. & Watters, R.F. (1985), "The MIAB Economy In South Pacific Microstates", *Pacific Viewpoint*, 26(3), 497-519

飯森文平(2014)「サモア村落社会における生活維持基盤の構築過程—儀礼の実践から—」『開発学研究』第25巻第2号, 1-11

飯森文平、Wong Seumanu Gauna、杉原たまえ(2010)「サモアにおける海外への労働力移動と伝統的農村社会」『農村研究』第 111 号,45-60

嘉数啓(1986)『地域科学叢書VI 島しょ経済論』ひるぎ社

Milner,G.B.(1966) *Samoan Dictionary*, Pasifika Press.

恩田守雄(2001)『開発社会学』ミネルヴァ書房

山本泰・山本真鳥(1996)『儀礼としての経済 サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』弘文堂

注

1)本稿の事例分析使用するデータは特別な断りがない限り筆者の現地調査から得られたものである。